

## 真のグローバル化とは

函館工業高等専門学校 社会基盤工学科 2年 飯田 吟太

近年、世界はグローバル化の波の中にある。この「グローバル化」を広辞苑で調べてみると、国を越えて地球規模で交流や通商が拡大することと定義されている。確かに現代社会ではこの言葉が意味するように、人・モノ・情報が国境という垣根を越えて世界規模でやり取りされている。しかし現在この「グローバル化」は、「企業のグローバル化」、「経済のグローバル化」と用いられるように、「通商」の意味として使われることが多い。本来ならば、世界規模の交流が行われ、平和な社会を実現できる「グローバル化」が「『通商』中心のグローバル化」となってしまったことで、世界は豊かな先進国と貧しい途上国に二分化され、先進国から途上国に武器が輸出される「グローバル化」が人々の争いを助長する構図となってしまった。このことから私は、「通商が中心のグローバル化」が本当の進めるべきグローバル化であるのかと疑問を持つようになった。

そのような中、今年の春、私は学校の研修で1週間シンガポールへ赴き、現地の学生と交流を行った。そこで私は、彼らの行動から真のグローバル化に必要なものは何かについて考えることができた。シンガポールは様々な宗教を持つ民族が一つの小さな島に暮らしている、グローバル化の縮図のような国だ。イスラエルやボスニア・ヘルツェゴビナがそうであるように、多民族国家では民族間、宗教間での摩擦が生まれやすい。しかしシンガポール人はある意識のもとに国を平和に保っている。

その理由は「誇り」と「配慮」であると私は考えた。彼らは様々な文化と交流を持つことにより、自らの文化を多面的に見つめることができるため、自らの民族が持つ文化の良い面を発見でき、それを「誇り」に思うことができる。またその良い面を、積極的に他の民族へ伝える活動もしている。この活動をそれぞれの民族が行うことで、互いの文化を相互に学ぶことができ、それぞれの文化に必要な「配慮」を学ぶことができる。この「配慮」によって、民族間、宗教間での摩擦を軽減することができ、それらが原因となった紛争をなくすことができているのだ。

私はアジアの中で最もグローバル化が進んでいるといえるシンガポールで、現在の「通商が中心のグローバル化」の代わりに、「誇り」と「配慮」を軸とした「グローバル化」が必要だと感じた。しかしこれらの考えはあくまで、同じアジア圏に暮らす民族同士の交流の中で生まれたものである。欧米など私たちとは異なる生活様式や文化がある国では、この「誇り」と「配慮」以外にも、さらに多くのことがグローバル化に求められているであろう。しかし私は今まで、アジア圏の国しか訪れたことがないので、さらに視野の広い考え方をするためには、多民族国家であるアメリカの中でも多くの民族が暮らしているロサンゼルスで学ぶ必要があると考えた。

ロサンゼルスは1992年に黒人差別、黒人と韓国系移民との間における対立など様々な民族対立を背景としたアメリカ史上最大の暴動がおこった都市である。しかし、現在のロサン

ゼルスはそれぞれの民族が自ら文化を守りながら共生している。実際に現地での暮らしを体験し、そこに暮らす人から話を聞くことによって、彼らがどのようにその民族間の対立を乗り越え、人種のサラダボウルと呼ばれるようになったかを学び、グローバル化に必要なこととは何かを考えたい。

また私は函館高専において、暮らしの基盤を整備し、人々の暮らしを向上させることができる「土木工学」を学んでいる。私は将来、この学校で学んだことを生かして、健常者、お年寄り、障がいを持つ人、LGBTの人、すべての人が満足な生活を送れるユニバーサル都市をデザインし、街のコミュニティを賑わいのあるものに変えていく都市計画を考える仕事に就きたい。ロサンゼルスのように多くの人々が暮らす都市では様々な文化を持つ人々に配慮した都市デザインを行わなければならない。しかし、日本ではまだこの考え方に沿ったデザインを行っている都市は少ないので、この考え方を学ぶことが難しい。そのため、多文化が共生し、伝統と革新が共生している都市、ロサンゼルスで見る街並みや景色はそんなデザインを行うことができる技術者になるための良い経験になると考えている。私は自らの将来のためにもロサンゼルスで多くのことを学びたい。

私はこのグローバル化に対する問題意識をもって、このホームステッププログラムに参加し、多様な人種が暮らすアメリカでの生活をする事により、グローバル化についての新たな発見をしたい。また、同郷の方がどのように世界で活躍しているのか、活躍するためには何が必要かを南加道産子会の方から学び、将来の自分の成長のために役立てたい。

ここで学んだ全てのことを、帰国後、地元北海道に暮らす人々に多様な世界とは何かを伝えていくため、様々な活動を行い、将来の北海道のリーダーとなれるようになりたい。